

英語複文構造理解のための関係節考

——応用文体論への予備的研究——

大 森 裕 實

A Study on Relative Clause for Comprehension of English Complex Structure: a preliminary research into Applied Stylistics

Yujitsu OHMORI

緒言

日本人学習者が TOEFL / IELTS / TOEIC といった英語能力試験において高得点を獲得できない一大要因を話し言葉の側面、すなわち、聴解能力の低さに求めることは「神話」に過ぎないのではないかという経験的疑問がある。加えて、最近の大学生の英語読解能力の低下が顕著であることを指摘する英語教員は少なくない。この疑問は、日本人学習者（大学生）の TOEIC® における Listening Part と Reading Part の得点不均衡をどのように説明するかという面と密接に関わるように思われる。事実、本稿筆者が過去 3 年間に亘り実施した愛知県立大学外国語学部生 TOEIC-IP 得点分析によれば、LM (Lower Middle) では Listening Pt. と Reading Pt. の平均得点はほぼ同じだが、UM (Upper Middle) では Listening Pt. に比べて Reading Pt. の平均得点が 50 点も低い（外国語学部 TOEIC FD 2014 報告参照）。この実態は聴解能力に強調点を置いてきた受験者や指導者にとっては意外な結果かもしれない。しかし、これより導き出される帰結としては「日本人学習者（大学生）が《複文構造》を十分に理解して English Passages を読んでいるのかどうか疑わしい」という素朴な疑問に行き着くことになる。

実際に、TOEIC® テストにおいて《関係節を含む複文構造》がどの程度使われているのかを『新公式問題集』に依拠して調査してみると次の結果となる。ここで《関係節を含む》ことが重要となるのは、後述する情報構

造の観点からも、関係節 (Relative Clause) なしでは《複文構造》を産出することが難しいからである。

Test 1 (Q153-200) : 5 relative clauses/ 15 passages (90 words 未満の短いもの2を除く) ⇒出現率33%

Test 2 (Q153-200) : 5 relative clauses/ 14 passages (90 words 未満の短いもの3を除く) ⇒出現率36%

ここで見出だされた出現率(平均34%)は、TOEIC®テストにおける比重としては Reading Pt. 後半50問中の17問程度の内容に関連すると考えられ、得点ベースで考えると105点程度分の比重になる。もちろん、出現率が設問数に単純に比例するわけではないが、この半分程度が不正解であれば上述の50点の不均衡は容易に生じる。

本論考は、関係節に関する正確な文法知識が言語能力 (Linguistic Competence) の一部として英語学習者(大学生)に堅固なものとして備わっているのかどうかを検討し、効果的学習法、すなわち「応用文体論」(Applied Stylistics) 構築に向けて予備的考察を行なうことを目的とする。

1 文体的シンメトリー感覚と構造的コロケーションの重要性

複文構造を十分に理解して、文意を正確に読み取ることのできる英語学習者(大学生)は想像するほど多くはない。次の事例とデータ分析は、本稿筆者が愛知県立大学の教養教育課程改革2014に当たり「精読」の重要性を強調して新たに開講した「名著を英語で読む」で行なった教授者解説と定期試験解答に基づく。

Eg. 1 Those therefore who from idealistic reasons desire profound changes in our social system and a great increase of social justice must hope that other forces than evil will be instrumental in bringing the changes about.

(B. Russell : Envy, *The Conquest of Happiness*)

↓

Eg. 1' Those therefore who from idealistic reasons desire profound changes in our social system and a great increase of social justice/ must hope that other forces than evil will be instrumental in bringing the changes about.

正解率 12/30 [40%]

※関係節中の動詞 **desire** に後続する 2 つの平行な目的語名詞句構造を見抜けないと英文構造を正確に読み取ることができない事例。

Eg. 2 While it is true that envy is the chief motive force leading to justice as between different classes, different nations, and different sexes, it is at the same time true that the kind of justice to be expected as a result of envy is likely to be the worst possible kind; namely, that which consists rather in diminishing the pleasures of the fortunate than in increasing those of the unfortunate.

(Russell : Envy, *The Conquest of Happiness*)

↓

Eg. 2' **While it is true that** envy is the chief motive force leading to justice as between different classes, different nations, and different sexes, **it is at the same time true that** the kind of justice to be expected as a result of envy is likely to be the worst possible kind; namely, that which consists rather in diminishing the pleasures of the fortunate than in increasing those of the unfortunate.

正解率 15/30 [50%]

※この Passage を構成する 2 つの大きなシンメトリー構造と、最後の関係節中の平行な比較構造を見抜けないと英文構造を正確に読み取ることができない事例。

Eg. 3 Aspiring sincerely to an international peace based on justice and order, the Japanese people forever renounce war as a sovereign right of the nation and the threat or use of force as means of settling international disputes.

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。(『日本国憲法第 9 条』)

↓

Eg. 3' Aspiring sincerely to an international peace based on justice and order, the Japanese people forever **renounce** [**war** as a sovereign right

of the nation] and [the threat or use of force as means of settling international disputes].

正解率 15/30 [50%]

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、**△**武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては [⇒の]、永久にこれを放棄する。(下線部を楔形記号 **△** 位置に移動させる)

正解率 6/30 [20%]

※主動詞 *renounce* に後続する2つのパラレルな目的語名詞句構造を見抜けないと英文構造を正確に読み取ることができない事例。従って、日本語正版についても、注意深く読まないで誤解を生じる限定的修飾箇所を前置させて、2つの目的語句が同じ構造をもつように変えると分かりやすくなる事例。

学習者個々人は既習の文法知識に基づき、単語列としての英文を見る虫の目は備えていても、長い *Passage* を俯瞰して見ることのできる鳥の目を十分に備えてはいない実態が観察される。その克服には、かつての英文学鑑賞用の文体論ではなく、英語を理解するための *Linguistic Stylistics* (言語的文体論) の視点と知識が要求されている¹⁾。また、自然な強勢・リズム・音調で音読を行えば、黙読で目視する構造的混乱から抜け出すことができると本稿筆者は考えており、上掲の言語的文体論には *Phonostylistics* も射程に含まれる²⁾。

2 言語変化の観点からの関係節考

米国の大学で言語学入門書として定評のある V. Fromkin & R. Rodman, *An Introduction to Language* 第5版 (1993) には、4コマ漫画 PEANUTS を引用して、言語知識と言語運用の違いを説明する箇所が見受けられる。

PEANUTS

Charles Schulz



Reprinted by permission: © 1964 United Feature Syndicate, Inc.

(Fromkin & Rodman 1993: 11)

- ① Here the fierce mountain lion sitting on a rock waiting for a victim to come along.
↓
- ② You think you look like a fierce mountain lion sitting on a rock waiting for a victim to come along.
↓
- ③ You look like a stupid beagle sitting on a rock pretending he's a fierce mountain lion sitting on a rock waiting for a victim to come along.

この漫画が揶揄するところは、話者の言語知識は、理論上はいくらでも文や句を繋いだり、名詞に修飾語句を附加することによって、無制限に長い文を生成することを可能にするが、現実にはそうした文が産出される蓋然性が低い点、すなわち、言語能力 (Linguistic Competence = 「知っている」ということ) と言語運用 (Linguistic Performance = 「知識を使う」ということ) とのギャップにある。

翻って、言語知識に基づく文法に適った文の生成能力は、本稿の趣旨に即して述べれば、関係詞を用いればいくらでも情報を附加していくことを裏打ちするものである (大森 2014: 319)。

I saw a man **who** was reading a magazine at the bookshop **which** was decorated with Christmas ornaments **which** were made of colorful pieces of paper **which** attracted a lot of people's attention on the street **where** a couple of young schoolmates played with soccer-balls joyfully.

この英文を普通の日本語に訳出するには「入れ子型構造」を取らざるを

得ないが、こうした「入れ子型構造」は人間の記憶力の限界に挑むような構造である。

私は [[[[[一組の学童が楽しみにサッカーボールを蹴っている] 通り
を行き交う多くの人々を惹きつける] 色彩豊かな紙でできた] X'mas
の飾付けで装飾された] 本屋で雑誌を読んでいる] 一人の男を見た。

英語の語順が中英語 (ME) 期に SOV 型から SVO 型に変化したことは英語史における事実ではあるが、その理由を Lightfoot (1982: 147-70) が生物的記憶力の限界に求めることは十分に説得力をもつ。SOV 型から SVO 型言語になった英語にとって、新情報は文末焦点化 (End-Focus) かつ文末重点化 (End-Weight) の 2 大原則に従って配置され³⁾、新情報を継続的に説述するには関係詞で後続していく方法を採用することが不可欠となる。

3 伝統文法がコード化する関係節の諸特徴

日本人学習者が大学入学時までには英語学習の基礎とする伝統文法 (規範文法) と、それより少し精緻な記述文法における「関係節」の扱いをここで概観しておく。

3-1 伝統文法が示す Relative Clause 基本型 (Bauer 1994: 67)

- 1) The girl **who saw it** let everyone know.
- 2) The girl **whom I saw** wore a green beret.
- 3) The girl **whose bag it was** looked very embarrassed.
- 4) The bag **which I bought** wasn't as big as that.
- 5) The bag **in which I put it** was blue.
- 6) The bag **I put it in** was blue.
⇒ **Contact-clause** 「接触節」: Jespersen (M.E.G. III, §7.1)
⇒ **Prepositional Stranding** 「前置詞残置」
- 7) The bag **that I put it in** was blue.
⇒ **Prepositional Stranding** 「前置詞残置」

3-2 伝統文法が示す関係代名詞の省略 (江川 1991: §50)

1. 目的格の関係代名詞省略

- 1) The book Δ I was reading yesterday was a detective story.
- 2) The lawyer Δ I consulted gave me some useful advice.
- 3) This is the hotel Δ we stopped at last time.

2. 主格の関係代名詞省略

- 4) She is not **the cheerful woman** Δ she was before she married. (補語の場合)
- 5) **There's** a man at the door Δ wants to see you.
(There is/are 構文の場合)
- 6) **It was** I Δ bought three flowers for Ms. Brown.
(It is ~ that ... 強調構文の場合)
- 7) She taught me the differences Δ **there is** between what is right and what is wrong.
(関係代名詞に there is/are が後続する場合)
- 8) She is just the type Δ **I always knew** would attract him.
(I know や we think など挿入句がある場合)

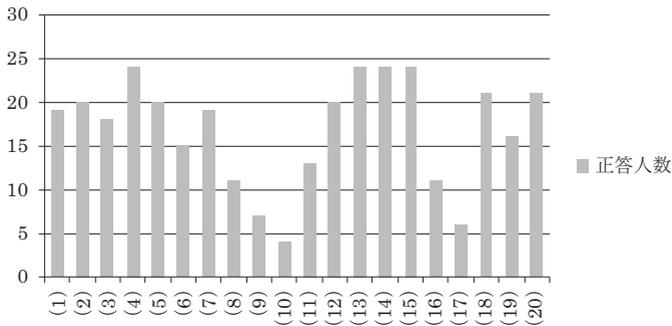
なお、実際に大学1年生を慎重に観察すると、高等学校学修課程の修了までに分類1の目的格省略は意識的に習得されていることはよく分かるが、分類2の主格省略については文法知識の一部として必ずしも認識されてはいないのではないかと推察される。

4 学習者における「関係節」に関する文法知識調査

現代英語において揺れの生じている関係節（主格関係代名詞の省略の容認可能性／前置詞後置と関係代名詞の Concord が定着しているか）について、20問の適否判断テストにより調査した一対象は、A大学1年生24名（外国語学部22名＋他の文系学部2名）、実施時期は2016年7月。

愛知県立大学外国語学部紀要第50号(言語・文学編)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
被験者 1	×	○	×	×	×	○	×	×	×	○	×	○	×	×	○	×	○	×	○	○
被験者 2	×	○	×	×	○	○	×	○	○	○	×	○	○	○	×	×	○	×	×	○
被験者 3	○	○	×	×	×	○	×	○	×	○	×	○	○	○	×	×	×	×	×	○
被験者 4	×	○	×	×	×	○	×	○	×	○	×	×	○	×	○	×	○	×	○	○
被験者 5	×	○	×	×	○	○	×	×	×	○	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○
被験者 6	×	×	×	×	×	○	×	○	×	○	×	○	○	×	×	○	×	×	○	○
被験者 7	×	○	×	×	×	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	×	○
被験者 8	○	×	○	×	○	○	×	×	×	○	×	○	○	○	○	×	○	×	×	○
被験者 9	○	○	×	×	×	○	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○
被験者 10	×	×	○	×	×	×	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○	○	×	○	×
被験者 11	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	×	○	×	×	×	○
被験者 12	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	×	○	×	○
被験者 13	×	○	×	×	×	○	×	○	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	○
被験者 14	×	○	×	○	×	×	×	×	○	×	○	×	○	○	×	○	○	×	○	○
被験者 15	×	○	○	○	○	×	×	○	×	×	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○
被験者 16	×	○	×	×	×	×	×	○	○	○	×	○	×	×	○	○	×	×	○	○
被験者 17	×	○	×	×	×	×	○	×	○	×	○	○	×	×	×	○	○	×	○	○
被験者 18	×	○	×	×	×	×	○	×	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○
被験者 19	×	○	○	×	×	×	○	○	×	○	×	○	×	×	○	×	○	×	×	○
被験者 20	×	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	○	×	×	×	○	○
被験者 21	×	○	×	○	×	×	×	×	○	×	○	×	×	○	×	×	○	×	○	○
被験者 22	○	○	×	×	×	×	×	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
被験者 23	×	○	○	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×	○	○	×	○	×	○	○
被験者 24	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×
正答人数	19	20	18	24	20	15	19	11	7	4	13	20	24	24	24	11	6	21	16	21
正答率	0.8	0.8	0.8	1	0.8	0.6	0.8	0.5	0.3	0.2	0.5	0.8	1	1	1	0.5	0.3	0.9	0.7	0.9
正答	×	○	×	△	×	×	×	×	○	×	×	○	△	△	△	×	×	×	○	○



Finding 1

Q. 江川 (1991) が「省略するほうが普通である」と指摘する **There is 構文** については、主格関係代名詞の欠落は認知度が高いか。

(13) There is somebody wants to see you. ⇒ 14/24名 (58%)

A. 比較的定着度が高い。There is 構文における“there’s”の機能が、聞き手の関心・気づきを誘うための一種の談話標識として働いているとの経験知があるのではないか。

Finding 2

Q. Bauer (1994) で「増加傾向にある」と指摘された主格関係代名詞の省略文 (6) They used to arrest **people** _Λ **did that kind of thing.** に関わる適否判断は、他の同様の関係節に関する適否判断との間に首尾一貫性が認められるか。主格関係代名詞の欠落は定着度は高いか。

(13) There is somebody wants to see you.

(14) It was the city gave us this job. (Bauer 1994)

(15) Many of those qualities we think are typical of Americans in general were the result of this frontier life. (江川 2012)

A. 前頁一覧表に示したデータからは、(6) を容認可能とした革新的文法判断者は (13) も容認可能としているだけで、それ以外に特記すべき適否判断首尾一貫性は認められない。

(6) を不適格とした被験者数 (保守的) 15名の内

(13) を不適格 9

(14) を不適格 8

(6) を適格とした被験者数 (革新的) 9名の内

(13) を適格 8

(14) を適格 5

(6) を不適格とした15名の内 (13) を適 6

(6) を不適格とした15名の内 (13) を否 9

(6) を不適格とした15名の内 (14) を適 7

(6) を不適格とした15名の内 (14) を否 8

(6) を不適格とした15名の内 (15) を適 9

(6) を不適格とした15名の内 (15) を否 6

Finding 3

Q. 江川 (1991) が指摘する「挿入句後続関係節」(4) *She is just the type Δ I always knew would attract him.* の主格関係代名詞の欠落は認知度が高いか。また、適否判断に首尾一貫性は認められるか。

A. 同種構文の (15) との適否判断において、首尾一貫性は認められない。

(4) を不適格とした被験者数 (保守的) 20名の内

(15) を不適格 7

(4) を適格とした被験者数 (革新的) 4名の内

(15) を適格 2

Finding 4

Q. **Prepositional Stranding** 前置詞残置余剰使用を **Exhausted Relative Clause** 「断絶関係詞節」(Jespersen, M.E.G. III, §5.5) [先行詞相当句が関係詞節中に代名詞で再出現するもの] と類似の言語現象であると捉えるなら、英語史的にも珍しい表現ではない。断絶関係詞節中の代名詞は、最近の生成文法用語では**再述代名詞 (resumptive pronoun)** という。ただし、G. Yule (1999) は次の英文 “Now there’s Craig Livingstone **whom** we still don’t know who hired **him**.” を (少なくとも書き言葉では) 不可として例示していることから、Native Grammarian においても容認可能性については判断が分かれるところであろう。

そこで、前置詞残置余剰使用を表わした (7) と (18) について、その容認可能性は高いか。また、適否判断に首尾一貫性は認められるか。

A. (7) を適とする者は5名、(18) を適とする者は3名であり、圧倒的に不適格であると判断されている。しかし、その適否判断に首尾一貫性は見受けられない。

(7) There is one thing of which you can be sure of.

(18) The order in which they went to the war in was executed in 1941.

(7) を不適格とした被験者数 (保守的) 19名の内

(18) を不適格 5

(7) を適格とした被験者数 (革新的) 5名の内

(18) を適格 2

ここまでの分析と発見に基づき、**暫定的結論**として次の2点を指摘する

ことができよう。

1. 今回の適否判断調査からは、対象とした学習者が同一言語現象（主格関係代名詞省略／前置詞後置と関係詞の *Concord*）に対して首尾一貫した文法性判断を行なっているとは認定できない。
2. 今回の調査で、大学入学時の学習者の関係節に対する理解が不十分であることが明らかになった以上、教育的側面からは、関係節が単なる複雑な文構造を形成するということではなく、一定の情報量を伝達する場合に極めて有用な表現形式であるという理解を学習者に促し、大学初学年の段階で、明示的かつ体系的に *Teaching & Learning* する必要がある。

結言

本論考の端緒は、大学生の英語学習者が英語で書かれた複雑な文章を十分に読み取ることができない現実を日々目の当たりにしたことにあった。しかし、考察を進めてみると、それが単に *TOEIC*[®] 等の英語能力試験で測られる「言語運用」の問題ではなく、「言語能力」としての「文法知識」が十分に獲得されていない深刻な事態が横たわっていることに気づいた。

そこで、学習者の文法性判断テストを実施し、その分析を通して、規範文法（伝統文法）の知識は定着しているのか、同時に、記述文法の知識は定着しているのかについて明らかにした。

然らば、そのような「文法知識」の脆弱性を惹起したものは何であろうか。それは端的に表現すれば「入力 of 質量不足」「指導 of 技量不足」に起因すると言わざるを得ない。その処方箋を単純化して描くとすれば、「入力」の問題については、人類の過去の遺産ともいべき「名著」と称される良質で達意の英文に接する機会を増やすことが必要であろう—それには、大学の教養教育（外国語科目）において、ここ四半世紀批判の対象となった「精読」の活用を見直すことが焦眉の急である。文法書に例示されるような（文脈の分からない）短い英文では、そこから習得される文法知識は長期記憶には堪えられないであろう。他方、「指導法」の問題については、言語系分野出身者が「英語を読む」ということに関心を示さず、また、文学系分野出身者が文学批評（20世紀文学研究の潮流）というような専門性しか持ち合わせないところに不幸が存する。本稿で示唆してきたように、言語的文体論に知識と興味を持つ教授者が適任であろう。それを本稿では

「応用文体論」と称し、その構築が必要であることを意識して、その予備的研究を行なった。

なお、《関係節を含む複文構造》の指導に関しては、「最新言語理論に基づく応用英語文法研究会」(JACET)の共同研究者である北尾泰幸(愛知大学准教授)と今井隆夫(愛知教育大学講師)が、生成文法と認知文法を応用した試みを行ない、近刊の論文にまとめているので、そちらも参照されたい——「言語理論に基づく関係節の明示的指導の効果」(愛知大学『一般教育論集』54号, 2018.3)。

Appendix

© Yujitsu O'mori

SURVEY FORM (※解答入り)

- (×) (1) I met a man wants to see you.
- (○) (2) These are a lot of questions we still need to go into.
- (△) (3) She taught me the difference there is between what is right and what is wrong.
- (△) (4) She is just the type I always knew would attract him.
- (×) (5) I visited the house which you were born.
- (×) (6) They used to arrest people did that kind of thing.
- (×) (7) There is one thing of which you can be sure of.
- (×) (8) I met a man wanted to see you.
- (○) (9) The man from whom I brought it told me to oil it.
- (×) (10) He is Mr. Goodman, a teacher whom I have great respect.
- (×) (11) The man whose house they are staying is an archaeologist.
- (○) (12) This is the music program of which I am fond.
- (△) (13) There is somebody wants to see you.
- (△) (14) It was the city gave us this job.
- (△) (15) Many of those qualities we think are typical of Americans in general were the result of this frontier life.
- (×) (16) The bus we were waiting never arrived.
- (×) (17) The toys which you are playing are made in Germany.
- (×) (18) The order in which they went to the war in was executed in 1941.
- (○) (19) There is an idealistic theory according to which democracy is the best form of government.
- (○) (20) He was respected by the people he worked with.

註

- 1) 今林修教授(広島大学大学院文学研究科欧米文学語学・言語学講座英語学分野)も同趣の見解と視点を持ち、日本英文学会の英語教育部門シンポジウムを企画実施している。直近では、大学英語教育学会(JACET)中部支部2017年度秋季定例研究会(2017.10.21)における講演「英文学とフィロロジーから大学英語教育を考える」がある。
- 2) Phonostylistics について詳しくは豊田昌倫(2017: 26-36) 参照のこと。

3) Quirk, et al (1985: §§18.3-18.9) は英語の語順に関連して、談話構造的 2 原則を指摘する。詳しくは、大森 (1994) 参照のこと。

- ① End-Focus — 情報と意思伝達力学の観点から、情報価値の低いものから高いものへ順次右方向へ線形配置する原則。すなわち、新情報を文末附近に置く傾向。
- ② End-Weight — 主題と焦点の観点から、旧情報に比して新情報のほうがより多くの言を要するため、右方向へ長く (重く) なる原則。すなわち、情報量の多い複雑な部分を文末附近に置く傾向。

参考文献

- Bauer, Laurie (1994) *Watching English Change*. Longman.
- Biber, Douglas et al. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman.
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説 〈改訂三版〉』金子書房.
- Fromkin, Victoria & Rodman, Robert (1993) *An Introduction to Language*, 5th edition. Harcourt Brace Jovanovich, Inc.
- Lightfoot, David (1982) *The Language Lottery*. MIT Press.
- 大森裕實 (1994) 「英語における語順変化の歴史的過程に関する一考察：再分析と類推」『愛知県立大学外国語学部紀要 〈言語・文学編〉』26.
- 大森裕實 (2014) 「空間の言語学」『現代社会と英語』(塩澤正, 他編) 金星堂.
- Pinker, Steven (2014) *The Sense of Style*. Viking Penguin.
- Quirk, Randolph et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- 斎藤兆史 (2000) 『英語の作法』東京大学出版会.
- 豊田昌倫・堀正弘・今林修 (編著) (2017) 『英語のスタイル—教えるための文体論入門』研究社.
- Yule, George (1999) *Explaining English Grammar*. Oxford U. P.